

『不思議なことを聞くもんだ。人間に情をかけてこそ神様つうもんだ。それは神様の名を騙る魔性のものの仕業に相違あるめえ。拙者が娘御の身代りになって退治してくれべえ』と勇み立ち狭い場所で長い刀は邪魔になると、庄屋の家重代の二尺ほどの刀を借り、自分の刀を替りににおいて、娘の羽織る裃（うちかけ）を被り、唐櫃に入って時のくるのを待った。夜も更けて六人ばかり村の若い衆が身仕度して集り、お侍を入れた唐櫃を担いて鎮守の森指して飛ぶように走りつづけて、お宮の前の石段に置くと跡も見ずに帰ってしまった。唐櫃の中でお侍は刀を抜き魔性が蓋を取るのを今や遅しと待ち構えていた。夜はしんとふけわたり、子の刻と思う頃森の草木がざわめき、一陣の風がスウツと吹いたと思うと、眼を爛々と輝かした魔性の怪物が、唐櫃の前に立ちはだかり、舌甜めずりして蓋を両手で持ち上げた。とつさに武士は刀のつかも通れとばかり相手の胸板めがけて突き刺した。魔性はアツと森にこだまするような声を挙げその蓋を投げすて虚空を擱んで悶絶した。そこで魔性の腹に足をかけ刀を引き抜いて首を打ち落とし用意していった太鼓を打って事